
デスノート（特別版）

ゴキポン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デスノート（特別版）

【Nコード】

N1315I

【作者名】

ゴキポン

【あらすじ】

デスノートの特別版を作りました。いろんなキャラクターがもしデスノートを持ったらどうなるのかなと思っていたら、書きたくなってしまう、こんな物を作ってみました。

シブタク編1（前書き）

この作品はワーグナーVSゴキポンVS綾鼈甲でお送りする作品です。私ゴキポンを応援よろしくおねがいます。

シブタク編 1

2×××年 日本（東京）

今の俺はこの世にはいません。どうしてそんなこというかって？当然だろ、俺は死んだんだよ。

しかも変な死に方で死んだんだぜ。

まさかあんな死に方で死ぬなんて俺はなさけねえぜ。

後悔もしている。あんなことするんじゃないかったことや、あんなことを言わなければよかったなど・・・。

まっ、俺は生まれたときからいっつも後悔してる日々をおくってるんだけどな。

さて本題に入るが、どうして俺が死んでるのか今からここで話そうじゃないか（俺ってやさしい？）。

あれは、俺が高校を留年して学校がくだらなくなり俺は学校を辞めたときのことだ。

俺の名前は渋井丸 卓男。略してシブタク。18歳。

学校を辞め、俺は不良になった。

そのとき俺は大暴れをして問題を起こしたりした。

今までのストレスを解消してとても最高だった。

そうしているうちにいつのまにか俺にツレ（部下）ができてしまった。

ツレは3〜4人ぐらいだった。

そいつらは俺とすぐ気が合っていて、とても最高だった。

これが仲間というものかと俺は初めて実感した。

「タクさん、次はなにしますか？」

「そうだな、こちら辺はもう走りつくしたからなー。よし渋谷までぶっ飛ばすか！」

「さすがタクさん、渋谷の渋という字がタクさんの苗字と同じだからそれで選んだというわけですか！」

俺達の次の目的地は渋谷に行くことを決めた。他のツレどもも賛成した。

「タ、タクさん。その前にお、俺・・・腹が減ってこれ以上走れませんぜえ」

「チツ！仕方ねえなあ。そんなに腹が減ってんならなんか食べばいいじゃねえか」

「そ・そんなこといわれてもなにを食えばいいんですか？」

「あそこにコンビニがあんだろ。そこんとこでちよっくらパチツてこい」

「へっへい！」

ツレは1人でコンビニに行った。

さっきコンビニに行ったのは俺のツレの1人でたかのまさかず高野正和。略してタカマサ。

俺ら5人の中で一番万引きが得意なやつだ。

今まで一番最高だったのはコンビニの商品を全部盗んだことがあるのだ。

1分もかからずタカマサがコンビニからもう出てきた。

「お？あいつにしては早いな」

タカマサが俺の前に戻ってきて

「すいませんタクさん。食品1個も盗めませんでした」

俺はテレビでやってる漫才のようにツッコミを入れ、タカマサの頭を叩いた。

「んにやってんだバツキャロー！のこのこ戻ってきやがって俺のツレとしてなさけねえぜまったく！！」

「すすいません！」

「まっいいけどさあ、それより早く行こうぜタクさん」

「そうだな、食いもんが手にはいらねえなら仕方がねえ！行くぞヤローども！！」

俺が出発の合図を送るとその後ツレ達がオー！と言った。

目的地の渋谷まで3〜4時間ぐらい俺らはバイクでぶっちぎった。

そして目的地の渋谷にたどり着き、みんなで休憩をした。

「いやゝさすがに長時間のバイクは疲れるツスねタクさん？」

「確かに、俺も今限界だぜ」

「タクさんといるとスツゲー楽しいぜ」

「えっ？ほ、本当か？」

ツレ達が思わぬ発言をした。

「俺らがタクさんに出会う前は学校からバカにされてたからな。タクさんに会ってから俺らは生まれ変わったって感じるんだ。」

「おまえら・・・そんなことを思ってたのかよ」

ツレ達は首を頷いた。

「ありがとうな・・・おまえら」

「よーしおまえら今日は渋谷で盛り上がるうぜー!!」

「よっしゃーその前に腹ごしらいといこうぜ!」

俺とツレ達ははしゃいだ。

渋谷の町を見て回ろうとしたら、

「あっ！ヤベータクさんここにくるまでずっと走りっぱなしだったからガソリンがなくなりそうだぜ」

「ガソリンかあ。それはマズいなー。よし、おまえガソリンがあるところ探してこい」

「ハイッ!」

俺がツレに命令したのはツレの1人で大門助^{だいまんすけろっ}。略してダイスケ。俺らはたまに「ダイちゃん」と呼んでいる。

待つてから10分経つとダイスケは戻ってきた。

「見つけやしたぜタクさん!ついてきてください」

「よーしでかした。行くぞ!」

一斉にバイクがブロロと鳴り出した。

ダイスケに案内されたガソリンスタンドについた。

「ここです」

「フオゝ、なかなかいいじゃねえかよ。しかも今ならだれもいねえぜ」

「チャンスですぜタクさん。今のうちにガソリンを根こそぎいただこうぜ！」

俺ら5人のバイクにたっぷりのガソリンを入れ込んで退散しようかと思ったら俺はいいことを思いついた。

「ちようつと待てよ……。いいことを思いついたぜ。おい、ダイスケ。例のものを持って来い」

「ヘッヘイ。あれですね」

ダイスケだけじゃなく他のツレ達も知っている。

ダイスケは俺のバイクから例のものを出してきた。

それは……

ポオオオ!!!

ものすごい熱い熱気が俺らの近くで吹く。

そう小型火炎放射機。俺のツレの1人火虞鷹螺子丸ひくたか。略してヒグラシらしまる。

ヒグラシが小型火炎放射器を作ったのだ。

「よーし、こいつで破壊させようぜ!!! やれー!!!」

俺の合図とともに火炎放射器が口から火を吹いた。

すると、

ドガンー!!!

ものすごい爆風がガソリン中を覆い、近所の人たちまで被害を加えてしまった。

「ギャー!!!」

女の人のがうめき声をあげて一瞬にして焼け死んだ。

「ヤッ、ヤベーようしようタクさん！」

「こりゃあ予想以上だったな……」

するとさっきの爆音に気がついて何台もののパトカーがやってきた。

「マズイ、パトカーだ。おまえらづらかるぞ！」

みんなは一斉にバイクに乗り、俺達はその場を去って逃げた。

その後しばらくたったあと消防車もきたがその火はなかなか消えず炎上し続けていた。

「あつぶなかつたつすねータクさん」

「ああ、まったくだ。しかし面白かったしいいじゃねえか」

「タクさん、次なにします?」

「そうだなあ、・・・適当にやっとけば?」

「えっ?タクさんそれはつまりどういうことですか?」

「俺は疲れたから、おまえらだけで町ん中遊んでこいっていったよ」

「そ、そうですか」

「了解ですタクさん。タクさんはゆっくり休んどいてくださせえ!

ツレ4人組みは再びバイクに乗り、イヤッホー!と叫びながらどこかへ行った。

俺は木のそばで寝転がった。

「ふあゝ。すっげーねみいぜ」

俺はあくびをしながら夜空を眺めていた。

しばらく夜空を見ているとだんだん眠くなってきた途端パタッ!と上から何かが落ちてきた音が聞こえた。

それを聞いた俺は音が聞こえたところに向かうと、1冊のノートが落ちていた。

黒いノートで表紙には「DEATH Note」とかかれていた。

「あゝ?なんだこりゃ?」

と興味を持ちながらノートを拾って中を見てみた。

そのノートを開いた最初のページには説明みたいなことが書かれてあったが俺はバカだからノートになんて書いてあるのかさっぱり分からなかった。

しかし、よく見ると右のページには左のページが書いてある文の日本語版が書かれてあった。

それを知った俺はその書いてある文を読んで理解した。

「書く人物の顔が頭に入っていないと効果はない ゆえに同姓同名の人物に一遍に効果は得られない」

「名前の後に人物に人間界単位で40秒以内に死因を書くとその通

りになる』

『死因を書かなければ全てが心臓麻痺となる』

『死因を書くとき更に6分40秒詳しい死の状況を記載する時間を与えられる』と書かれてあった。

「なんかうさんくせえな。・・・でもそれでもやってみたくなるのが俺だ」

さっそく俺はノートを持ち、バイクに再び乗った。

誰を実験台にしようか考えていたが、

「ん！まてよ。書く人物の顔が頭に入っているやつじゃないと死なないのか・・・ならば」

そこで俺は最初のターゲットを見つけた。もちろんその人物は俺の頭にちゃんと入っている。

そいつは高校時代のせんこうだ。名前は「坂田良太」。

さかだりょうた

俺をつくづくバカにしつづけたせんこうだ。

今思い出すだけでもものすごい腹が立つ。

「そつだ！あのせんこうの名前を書こう！」

俺はバイクを止め、その場でノートを出して名前を書こうとしたが、

・

「あつ・・・。漢字忘れた」

俺はなんてバカなんだ。

時間をかけて思い出したりはしたがやっぱり思い出せなかった。

仕方なく俺はひらがなでそいつの名前を書いてみた。

時計を見て今22：16分だから40秒を計った。

俺は時間を見ながら、その場を歩いていた。

もうすぐで40秒たつなと思いつながら、そこで偶然電気屋を通っていた。その電気屋を通り過ぎる前にショーケースにあったテレビが突然臨時ニュースを流し始めた。

「番組の途中ですが、ここで臨時ニュースをお送りします。今日午後22：17頃、全国にいる坂田 良太という人物が全員心臓麻痺で死亡しました！」

それを聞いた俺はいそいで電気屋の前に戻った。

すると確かにテレビ画面には書いてあった。「全国の坂田 良太が突然の死亡」と。

俺は急いでノートを確認した。

何回見てもノートには「さかだ りょうた」とひらがなで書いてあるだけだった。

「う、嘘だろ？」

そう思った俺だがしかしだんだん表情が変わりつつある。

「ヒツヒツヒ・・・ヒャーヒーヒーハハハハ！！マジかよオイッ！！あいつ死んだのかよ！おまけに他の坂田 良太まで死んじまうとは情けねえぜまったくよ！」

俺は笑いが止まらずバイクに乗りながら笑い続けた。

そして、さつき休んだ場所に戻り、また休憩しようとしたら

「気に入ったようだな・・・」

誰も人の気配は感じないのに誰かの声が聞こえていた。

「おい、タカマサ達か？」

呼んでみたが、誰も来なかった。

おかしいなと思ったがそんなことは気にせず寝ようとしたが、

「そのノート欲しいか？」

まただ。またあの声が聞こえた。

俺は気になって眠れもできなかつた。

「誰だ！？」大きい声で言ってみたら、

「あんたには見えているはずだぜ？」

「なんのことだ！」

「・・・上を見てみな」

とそう言われいうとおり上を向くとなにかがいた。

翼があつて、人みたいな姿をしていて全身黒だった。

それを見た俺は驚いて、尻餅をついた。

すると俺のそばに現れた。

「もう一度聞くぞ。そのノート欲しいか？」

「な、なんのことだよ!？」

「おまえの持ってるノートだよ。そのノートの持ち主だ」

「こいつを取りに来たのかよ？」

「そのつもりだったんだが、もうそのノートは人間の手にあるからなそいつはもうおまえのもんだ」

俺は、こいつが何を言ってるんだかさっぱり分からず質問しつづけた。

「こいつを俺にくれるのか？」

「ああ。もうおまえの物だ。好きにしちまえばいいさ。その方がそのノートも喜ぶしな」

「ちなみにてめえの名前は？」

「・・・リユークと呼んでくれ。おまえは・・・？」

「渋井丸 卓夫。略してシブタクだ」

「なにも略さなくてもいいが、シブタクか・・・いいネーミングだな気に入ったぜ」

「あんたの様子は上から見させてもらったぜ。そう1時間前に起きたガソリンスタンドの大爆発。派手にやりやがったな」

「俺らはインパクトを求めているからな。仕方なくやったただけだ」

「(・・・プププ。人間って面白っ!)」

「最後に聞くが、このノートを持っていると危ないっということはあるのか？」

「おお、不良にしては鋭い勘を持つてるな。だが、俺はおまえになにもしないし、狙われもしないさ」

するとそこにツレ達が戻って来た。

「おいタクさん。ただいまっす!」

「どうしたんツスカ、タクさん？」

「ちようどいいところに来てくれたぜ。おまえらに紹介したいやつがいるんだ」

と俺は、リユークに紹介しようとしたが

「どこにいるんっすかタクさん？」

「おまえら見えてねえのかよ?俺の近くにいるだろ!」

「誰もいませんけど・・・」

「えっ？」

確かに俺にはリユークの姿は見えている。だが、ツレ達には見えていない。

「どうしたんすか？まさか幻覚でも見てしまったんすか！？」

「いや、なんでもない・・・」

一体どうなってんだ？リユークは一体何者なんだと考えながら俺達はまた渋谷中の町を走り回った。

そして、俺の上にはリユークがいた。

どうやらついて来るみたいだ。

ここから、俺の新たな人生を迎えることになるのだった。

シブタク編1（後書き）

この対決は10月の1日〜11月の1日までなのでそれぞれこの連載小説は期間限定だと思っています。ご了承ください。

シブタク編2（前書き）

家族や学校の連中達にバカにされたシブタクとそのツレ達。5人は家出をしてバイクでいろんなところを走り回ったり、事件を起こしたりわいわいした。

しかし、ある日1冊のノートが空からシブタクの前に落ちてきた。さらにそのノートの持ち主「リユーク」も現れた。

ノートに高校時代の先生の名前を書くとその先生が心臓麻痺で死亡した。

こうしてシブタクは新たな人生の扉が幕を開けようとする。

シブタク編2

俺らとツレ達はバイクで夜の渋谷を走り回った。そして、俺には見えていて他のやつらには見えない謎の野郎、リユーク。

あいつは本当に一体何者なんだ。

俺がノートを拾ってからあいつは現れた。

バイクで渋谷中を回ってから1時間30分ぐらいはかかっている。俺らの帰る場所はない。

なぜなら、家を夜逃げして4人で遊びまくっているからだ。

だから俺らはもう後戻りができなくなったのだ。

理由はみんな一致している「・・・退屈だから」
それだけだ。

「・・・」

「どうしたんすかタクさん？ずっとだまってて」

「いや、別に」

「なにか悩み事があるんなら俺達に相談してくださいえ！」

「それはありがてえが、本当に大丈夫だ」

「そうすか・・・」

あのノートのことをあいつらに言ってもたぶん信じてくれないだろうと思ひ、俺はツレ達には秘密にすることにした。

それにしてもあのリユークはいつまでついて来るんだ？さっきからずっとだ。

しかもクスクスと笑ってやがる。なにがおかしいんだ？

「クッククック」

「（くそ、なんか俺らが笑われてる感じがするぜ）」
とすぐそこにはゲーセンを目撃した。

「そうだ、ゲーセンでもやるうぜ」

「いいッスね。さすがタクさん」

「ちようどさっき銀行行ってきて金を取ってきたぜ」

「金？いくらだ？」

「500万だぜ！」

「ご、500万！？さすがカネマルだぜ。よくそんな大金を取ってきやがったな」

「いえいえ500万なんてまだまだしょぼいっすよ！」

ここで4人目のツレを紹介しよう。

名前は金田丸尾^{かねだ まるお}。略してカネマル。

金のこととなると目の輝きが変わり、手に入れるためならどんな手段も使う男だ。

「ヒツヒツヒ、ここの銀行回りを見たら防犯カメラが少なかったんで余裕だったっすよ！」

「あいかわらずおまえというやつは・・・」

「んじゃさっそくゲーセンに行きましようぜタクさん」

「おう！」

「・・・友情っていいね・・・」

リユークは小さい声で呟いた。

ガーツ

ゲーセンの扉が開き、俺達は中に入った。

その中には見てのとおり、たくさんのゲームがあった。

しかも俺達が今までやったことがないゲームがたくさんあった。

「おー、こりゃあすげーぜ！」

「なんかテンション上がってきたっすねー!!」

「んじゃさっそく金を分け合おうじゃねーかよ！」

カネマルが盗んできた500万を俺達5人で分けた。

5人いるからちょうど1人100万ずつになる。

「よし、1人100万ずつな」

「しかし、100万という大金をゲーセンに使ったのはなんかもつたいいな」

「よし、いったん全員散開してしばらくここで遊ぶぞ！」

俺の後にみんなは「オーツ!!」と試してみんな分かれてゲームを

しに行つた。

だが、俺はゲーセンで遊ぶ気分じゃなかった。

俺は迷わず、ゲーセンから出て自販機で缶ビールを買い近くのベンチに座つた。

ビールを飲みその後ポケットからタバコを取り出して、交互に飲み吸いした。

「はあ……」

こういう時は静かな場所で缶ビールを飲みながらタバコを吸うにかぎるものだ。

「どうしたシブタク？なんか悩みがあるんなら俺に相談しな」

そこにリユークが俺に話し掛け、タカマサの言つたセリフを真似してきた。

「あん？別に悩んでねえし、おまえには関係ねえだろが！」

「あの時おまえが恨んでたせんこうを殺したことを考えてたんだろ？」

「ギクツ！」

そのとき俺は飲もうとしていた缶ビールを持っていた手が止まつた。

「もしかして凶星？ハツハツハツハ！」

「うつせーんだよクソが！大体おまえは何物なんだよ一体どこから湧いて来たんだよ！」

リユークはゆつくりと「……死神界から来た」と答えた。

「死神界……だと？」

「おまえら人間には信じれねえ話かもしれねえが、この世界には「人間界」と「死神界」という2つの世界があるんだ。俺ら死神が人間界へ自由に行き来できる穴があつてそこから俺はここに来たのだ」リユークの話聞いたが俺は信じるべきか信じないべきか迷つた。

「ちなみに、その穴はいつからあるんだよ？」

「百億年前からだ」

「ブフツ！？」

その時は俺はびっくりして飲んでいたビールがおもわず口から出て

しまった。

「俺達死神はこの地球ができる前からずっと生きていたんだ。だが、その時はすぐつまんなかったぜ。しかしあるとき地球という星ができたことを知った俺達はこの星に死神界を作ろうと話し合っていたんだ。」

「そんなことがあったのか」

「信じるのか？」

「・・・なんとなくな」

「では話の続きだがおまえが持っているノートのことを話そう。そのノートは・・・」

リユークの長話を聞いていたら知らないうちに俺は寝ていた。

するとゲーセンから戻って来たツレ達が現れ、

「大丈夫ツスかタクさん？」

「んんあん？」

「すごいぐつすり眠ってましたけどゲームに夢中で疲れたんですか？」

「まあそんなとこだ」

俺は嘘ついちゃった。・・・まいつか。

「それよりさあ俺達今チヨ一眠いーんだけど」

「どっか野宿するところ探そうぜ」

「その必要はないぜ。野宿するところはここさ」

「あっ！？ここって公園だったんすか！ゲーセンの近くに公園があったなんて気が付かなかつたぜ。流石タクさん！！」

「よーし、ヒグラシ！テントの準備を始めな！！」

「ハイッ！！了解ッス！！」

テントの準備はヒグラシだけではなく当然みんな準備をする。

とそこにリユークがやってきて俺に変なことを言ってきたりしてきた。

「ヒューヒュー、よっ！大将！」

「うるせえ」

「ん？」

「い、いやなんでもないんだ」

急いでテントを張り、みんなで寝た。

この生活は2年前から始まった。

最初は準備とかいろいろ困っていてけんかが起きたりしたが、今はそのようなことはなくなった。

この生活には俺達は慣れてるんだ。

ツレ達はぐっすり寝ているが俺だけはまだ起きている。

リユークから聞いた話が気になって眠れなくなった。

俺は自分のバイクからノートを取り出しあいつの名前を書いたペー
ジを見た。

「あいつは本当に死んじゃったのか・・・」と俺は心の中でそう思
った。

とても信じれない。だがこれは現実だ。

そして俺はこう思いついた。

このノートの力を使って俺達をバカにした連中に復習ができるとい
うことを考えた。

「見てろよあんにやるー！このノートの力でおまえらを抹殺してや
るからな覚悟しやがれってんだ！！」

そしてその復習計画は明日行うことになった。

シブタク編2（後書き）

いかがでしたか？このシブタクというキャラは原作第1話で葬りましたがこの小説はシブタクを主人公としたストーリーです。

今後どうなるか目が離せません。

自分も一生懸命読者に見てもらうために書きたいと思います。

応援よろしくです！！

シブタク編3（前書き）

シブタクはついに復習計画を実行した。

シブタク編3

俺はリユークからノートやリユークが住んでいる死神界のことなどいろいろ話を聞かせてもらった。

ノートに人の名前を書くこと死ぬ。

俺はこのノートの力を100%信じた。

そして俺はこのノートを使って俺を散々馬鹿にしたあいつらに復習することを決意した。

ついにその日を迎えることになった。

「さて、どうすつかねえ？」

「なにがだ、シブタク？」

「俺はこれからあいつらに復習するんだが、どう始末しようか考えてんだが今ひとつ思いつかねえんだ」

「いい方法があるぜ」

「何！本当か！？教える」

「りんごをくれたら教えてやってもいいぞ」

この死神リユークの大好物はりんごだということも知っているし聞いた。

死神というのはいつけん怖いし、人間の生き血が大好きなのかと思っていた俺の想像とは全く違う。

血ではなく・・・りんご？なぜだ？

仕方なく俺は近くの果物屋によった。

「へい、いらつしやーい！」

そこに果物屋のおっちゃんが出て来た。

おっちゃんは俺の顔を見たら突然驚きだした。

「うつつわー！！」

「なんだよ、なんで俺の顔を見てビビってんだよ？」

それは見ても当然だ。俺はおっちゃんから見たら不良だからビビるのはあたりまえだ。

「な、なにかようかい？」

おっちゃんは体がものすごい震え上がっている。

「俺はちよつとここで買い物をして来ただけだ。それがどしたんだ
よ」

「お、お買い物ですかい？でーお客様、一体なにをお買いに？」

「りんごだ」

「りんご？どうしてりんごを？」

「はあ？いちいちんなこと聞かなくていいんだよクソが！さっさと
持ってこんかい！！」

「へ、へー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

今の俺はものすごくイライラしている。

おっちゃんは慌ててりんごを急いで持ってきた。

「りんご……です。はい」

「1個くれ」

「お会計……ひゃ、150円……です」

「はあ！？1個150円だと？」

「な、なにか文句あんかい？」

「普通のスーパーでもりんご1個100円以下なのになんでこの
店は1個150円なんだよ！詐欺じゃねーのか！！」

俺はおっちゃんに怒鳴った。

「ヒイイッ！！」

「チツ！仕方ねえ。釣はいらねえぜ」

俺は財布から1万円を出し、りんごを持って果物屋から出た。

その後、あの果物屋のおっちゃんは意識を失ってしまい病院に搬送
されたらしい。

「ムシャムシャ！うんめー！あんがとなシブタクー！」

リユークはりんごをムシャムシャと食いながら礼を言った。

「別に。でいい方法ってなんだ？」

「死因を書くんだよ」

「死因？どういうことだよ」

「おまえノートの説明読んだんだろ？だったら知ってるはずだぜ？」
「確か、名前の後に死因を書いたらその通りになるって・・・はっ！」

「そう、例えばおまえが恨んでいるせんこうを殺そうとする。ノートにそいつの名前を書いた後、自殺すると書いたらその通りになりそいつは自殺するんだ」

「・・・」

「ん？どうしたシブタク」

「いいこと聞かせてもらったぜリユーク」

そして俺は復習計画を実行した。

ツレ達はまだ起きていない。

昨日は遅くまで遊んでいたから、すごくぐっすり眠っている。

俺は、頭の中にそいらの顔と名前を思い出してノートに名前と死因を書いた。

「これでよし」と

「なんて書いたんだ？」

「まず最初に岡村拓都おかむら たくとは廊下のと真ん中で心臓麻痺で死亡させ、その姿を見た笹田大介ささだ だいすけは見つけて救急車に連絡しようとしたら急に目眩めくらが起こって近くの窓ガラスにぶつかり、3階から落ちて死亡。そして最後、俺を散々馬鹿にしたあのせんこうには無残な死に方をしてもらっぜ！」

一方、シブタクが恨んでいた連中がいる学校では本当に2人は死んでいた。

そこにある1人の先生がいた。

郷田雷門ごうだ らいもん

この人がシブタクが恨んでいる先生。

3階から落ちた笹田の様子を見てたら、後ろから死んでいたはずの岡村がそこにいた。

「お、岡村じゃないか！なぜ生きているんだ。おまえはさつき死んだはずじゃ・・・」

そして死んでいたはずのもう一人の動きがピクツと動いた。

「!?!」

笹田の手が郷田の足を持つていた。

「うわっ!!なんだおまえ、放せ!」

死んでいたはずの2人が動いている。

まるでゾンビのように。

すると、岡村の手には畑など稲刈りに使う鎌を持つていた。

ゆっくりと岡村は郷田に近づいて来る。

おそらくその鎌で郷田を殺すつもりのようなのだ。

「おい、おまえ何をする気だやめろ!」

岡村は全く聞いていない。

「おまえやっていいことと悪いことがあるんだぞ!」

「.....」

だが、もう郷田の目の前には岡村がいた。

そして、その鎌は郷田の首を狙い振った。

「うわーーーーー!」

ブシュッ!ザクッ!

郷田は首を切られ、無残な死に方をした。

郷田のまわりには血で覆っていた。

その後、岡村と笹田は倒れて再び死亡.....

その後テレビでは当然臨時ニュースとして報道されていた。

「フフフフフツ。ギャハハハハハ!」

「.....」

「あいつら死んだぜ、ざまあみるーヒヤハハハ!」

すると、ツレ達は俺の笑い声で起きたせいかみんな起きた。

「ど、どうしたんツスカ?」

「今日は最高だぜ!フフフ.....」

「な、なんか今日のタクさん朝からテンション上がってますね」

「そうだろ!っしーおまえら今日も張り切っつていこう!」

「オ、オーーーー!」

5人は盛り上がっている中リユークはクスクス笑いをした。

「・・・やっぱり、人間って面白！」

だがしかし、ここで誰かに見られているという事とは今の俺達には全く知る由もなかった・・・。

シブタク編3（後書き）

今回はちょっとグロテスクな感じな部分がありましたが、どうだったかな・・・かな？

いや〜ついにシブタクはやっちゃったねえ。

次回はシブタクに新たな敵が出現するよ。

まだまだ続くんだよ・・・だよ！

シブタク編4（前書き）

復習計画が成功して気分爽快になったシブタクだが・・・

シブタク編 4

俺はついにやつらを殺した。

今でも笑いが止まらない。

「フフフ・・・」

「なあシブタク。おまえさつきから笑ってて気持ち悪いぞ」

リユークは俺に話し掛けてきた。

「ああ、ついにこの手でやつらを葬ったんだ。これで俺のストレスのもとを消した。だがな、聞いてくれよりユーク」

「あん。なんだ？」

「まだ殺し足りねえんだよ・・・」

「!？」

リユークは一步後ろに下がった。

「なんでか知らねえが殺したいやつを殺ったのにまだ殺り足んねえんだよ！」

「・・・」

リユークは俺を見て黙った。

「そうだ、ツレ達に聞いてみよう。ツレ達にも俺と同じ馬鹿にしがった奴がいるかもしれねえからな。そいつらも消さねえとな!!」

「・・・」

「リユーク。おめえさつきからだまってんだがどう思うんだ？」

俺はリユークに俺の考えをどうか聞いてみた。

「・・・おまえの考えていること俺より死神以上だな」

「そうか・・・そう思うかハハハハ!!」

とちようとテントを片付け終えたツレ達がやって来た。

「ウィ〜ツスタクさん。テント片付け終えたぜ」

まず最初に俺に話し掛けたのはマサタカだ。

「・・・なあマサタカ。1つ聞いてもいいか？」

「ええ、イイツスよ？」

俺はその後、タカマサ以外に他のツレにも恨んでいる人を聞いた。どうしてそんなこと聞くのかというと、決まっていることだ。そいつらを殺すんだよ。

俺はツレ達にトイレに行つてくると嘘を行つて、便所でノートを出しツレ達に教えてもらった人の名前を早速書き始めた。もちろん死因を書いてね。

トイレに入ってから1時間を経過して出た。

すると、真つ先に俺のもとに来た。

「大丈夫ですかタクさん？トイレからなかなか出ないんで俺達心配したんですよ！」

「そうなんか、すまないな。どうも久しぶりぶりって感じだったから思いっきり出したぜ！」

「あ、なーんだそうなんスかー。ハハハッ」

「うゝ、タクさんがトイレ行つたから俺も行きたくなくなってきたぜ」

「お、俺も・・・もう限界〜！」

「おい、それはどういうことだよ！！！」

ツレ達は大急ぎでトイレに向かった。

全く面白い連中だぜ。

リユークはニヤリと笑った。

「で、シブタクどうだった？」

「おう、全員刃物を持って自分の体をバラバラにして死亡って書いてやったぜ」

「ふう。なんて残酷なことを書くんだおまえは」

「リユーク、俺が初めておまえに会った時こう言ったよな。俺らはインパクトを求めてるってな」

「こいつはさすがの俺でも刺激がちょっと・・・」

「吐きたけりゃ向こうで吐いてもいいぜリユーク・・・」

リユークは向こうに行つて吐き始めた。

ゲロゲローーーーー！！

吐いたゲロは一瞬に周りに八エが飛んでいた。

「あゝスッキリしたぜ」

これでいいんだ。

俺はいいことをしたんだ。

散々馬鹿にしてきたやつらを殺したんだ。

その頃一方日本警察本部では緊急会議が行っていた。

会議には全国の警察たちが集まっていた。

「一体どうなっているんだ？死んでいる人は全員学校の先生や生徒ばかりだ」

「これは偶然ですよ。少し考えすぎではないかな？」

「しかし、これは大事件だ！このままでは他の人まで殺されるかもしれない！」

あちこち警察たちが喋っていて会議室はともうるさい状態だ。

するとそこに、黒いコートを着た人が前に立ちみんなを静かにするように注意した。

みんなが黙った後その人は喋り始めた。

「これより、Lからの通信電話が来ます」

「L」という名前を聞いた全員はまた騒がしくなった。

「何っ！だと！？あの様々な困難な事件を解いているという謎の名探偵……」

「まさかあのLもこの事件解決に協力してくれるのか!？」

「みなさん、お静かに！ただいまよりLとの通信をします」

謎の人はパソコンのEnterキーを押して巨大モニターから声が聞こえた。

「みなさん、始めまして。私はLです
オオオオ!!!」

みんなはLの声を聞いて、感動していた。

「今日みなさんをここに集めたのは他にもありません。そう、今起きている事件についてです」

「あつ、はい。この事件はほとんどの人が自殺しているんですが、しかもなかには自ら体を切って死んだ人もいるんですが、やはりこ

れも自殺に入るのでしょうか？」

「はい。この場合は自殺という面もありますが、これは自殺であつて自殺ではありませんねえ」

「ええ！？それは一体どういうことなんですか？」

「つまり、一見これは自殺のように見えるんですがこれは殺人事件ということですよ。しかもこの事件が起きたのは、昨日からですよ」

「つまり・・・」

「これは連続殺人事件ですよ」

その話を聞いた他の人たちはざわめく。

「しかも昨日今日起きた事件のことがもう1つ分かりました。それは、事件が起きた場所ですよ。昨日起きたのは全国にいる「さかだりよつた」という人物の名前が死にました。さらに今日死んだ人物はそれぞれの学校にいる教師と生徒。教師と生徒は他にもいるのにならぬ。あの人達だけ殺されるのでしょねえ。これは明らかにその人たちになんらかの恨みがあつて他の人を巻き込まず、そのターゲットだけを殺したことになります」

「しかし、死んだ人達は自殺したと」

「自殺であつて自殺じゃないとさっき言いましたよねえ？」

「うっ！す、すいません！」

「あなた、お名前は？」

「松田ですよ」

松田が自分の名前が言った後隣にいた男が立ち始めた。

「すいません、L。こいつ、うちの新人りなんですよ」

「そうだったんですか。どうりで私に対してムカツク質問してくるわけですよ」

「いや、ハツハツハ！後で松田にそう言つときですよ」

「ちなみにあなたのお名前は？」

「私は東京警察に所属していて局長を務めている夜神総一郎やがみそういちろうと申します！」

「よろしくお願ひします。では話の続きですが、次は事件の犯人に

ついでですがおそらくその死んだ生徒と同じ年または死んだ教師と同じ年の人物でその学校にいた者が犯人だと思われます」

「オオ、もう犯人の目星までつかんだのか！流石だ」

「ではそうと分かればその学校に連絡して徹底的に調べる！」
警察に命令したのは夜神総一郎だった。

「では念のため特殊刑事にも協力してもらいましょう」

し言う特殊刑事とはしが認めている世界中から集まったエリート部隊である。

「おお特殊刑事も手伝ってくれるんすか。なんかカツコイイですね！」

松田はまるで子どもみたいな発言をする。

ツレ達はトイレから出て、出発した。

俺は、どうもこの渋谷が気に入っちゃった。しばらくここで身を潜めて暮らそう、そう思った。

すると、なんだ？俺だけ気のせいかも知れないが後ろから誰かにつけられている感じがする。

バイクについているミラーを見たら俺の後ろに別のバイクがいた。

バンッ！！

すると突然後ろから発砲してきた。

だが、なんとか当たらなかつたが弾丸が俺の服にかすりつけた。

「ターゲット・・・発見・・・」

いきなり俺たちに襲い掛かってきて一体何者なんだ！？

シブタク編4（後書き）

ついにしが登場！そしてシブタク達を襲い掛かってくる謎のバイク！次回、シブタクとそのツレ達VS謎の人物の壮絶なバトルが始まる！！

シブタク編5（前書き）

シブタク達に謎の敵現る！一体どうなる！？

シブタク編 5

何者かが後ろから俺達を撃ってきた。

ドンッ！ドンッ！

敵は次々とシヨットガンで弾を発砲してきた。

しかし、俺達はバイクでその弾をかわすのだった。

「おめえら、大丈夫か！」

「ヘッヘイ！こっちは大丈夫ツス。でも、なんなんスカあいつは？」

「わからん。だが、俺達の命を狙っていることだけは確かだ」

ウー！ウー！

敵のバイクの後ろにはパトカーが走っていた。

もしかして、さっきの銃声を聞いて飛んできたのかもしれない。

だとしたら、俺達の敵である警察は今だけは見方というわけだ。

「そのシヨットガンを持っているバイクの人。武器を捨てて、お

となしく警察のお縄につきなさい！」

パトカーに乗っているのは松田と夜神だった。

「しかし、あいつ前にいるバイクを狙っているなあ」

「本当ツスね。どうしてでしょう？」

プルルッ！プルルッ！

と突然携帯が鳴り出した。

松田が今車を運転しているから、夜神が電話に出た。

「はい、こちら夜神です」

「夜神さんですか？私です。Lです」

「！？」

その声を聞いた夜神は驚いた。

「ど、どうして私の番号を・・・」

「あなたのこと調べさせていただきました。その番号も」

「さっさすがLですね」

松田はLを関心していた。

「あなたが追っている前のバイクいますね？」

「ああ、いますよ」

「あの人を止めないでください」

「えっ！？どういうことだ！」

「あのバイクに乗っている人は私が呼んだ特殊刑事の1人です」

「なんだって！」

「どうやらターゲットを発見して今追いかけていますね」

「つまり、事件の犯人を見つけたというのか？」

「はい」

「どうやらLはもうこの事件の犯人を見つけたみたいだ。

特殊刑事が今追いかけているバイクが犯人らしい。・・・って犯人
つてまさか俺かー！？（シブタク）

俺とツレ達はバイクで一生懸命敵逃げている。

ここで俺はツレ達に命令をした。

「おまえら、今こそフォーメーションAをやるときだ！」

「ええ！？フォーメーションAって、あれはまだ1回も練習してま
せんぜえ」

「もたもたしてつたら俺達は殺されるぞ！」

「仕方ない、フォーメーションAだ！」

ツレの4人のうちの2人は後ろに下がって敵のバイクの左右に移動
した。

「せーの！」

ドンッ！

なんと、2人で敵のバイクに体当たりをし始めた。

「チッ！このままじゃバランスが崩れちまう。ならば！」
とポケットから丸いものを出した。

それは手榴弾だった。

それを左右にいる2人に1個ずつ渡した。

「俺からのプレゼントだ。あばよ！」

と楽々とフォーメーションAを攻略されてしまった。

「だよな。俺達何もやってねえのにね、タクさん？」

「あ、ああそうだよな俺達無関係だもんな！」

このとき俺はとてもしゃな感じがすると俺は思った。

そして、あの爆発に巻き込まれ、パトカーに乗っていた2人は無事だった。

「ギリギリだったな。やるじゃないか松田」

「いや、それほどでも。俺、警察になる前レーサーだったからあの爆発を回避できたツスよ」

ブルルルッ！ブルルルッ！

また電話が鳴り始めた。

それをとったのは夜神。

「はい、こちら夜神です」

「Lです。逃げられましたね」

「すみません」

「いえいえ気にしないでください。おかげで犯人の場所は掴めたんですから。ところで夜神さん達の方は大丈夫ですか？爆発があったみたいですが」

「無事です。松田がああの爆発を避けきつたみたいです。（松田は）元々レーサーだったらしくその才能が再び甦つたみたいですなw」それを聞いた松田は照れた。

「それはすごいですね。松田さんは是非、私の車の運転手にしてほしいですね」

「ハハハ、Lご冗談を！でもだめですよ。彼はうちの面白キャラですからね」

「わかりました。では、話の続きですが今犯人は逃亡していますが私のところではちゃんと犯人達の居場所は分かっています」

「なんと！」

「では、私が犯人達の居場所を教えるんで夜神さん達は犯人逮捕を続けてください」

「分かりました。連絡をお待ちしております」

その頃あの特殊刑事の1人はのんびり休憩していた。
プルルッ！プルルッ！

男のもとにも電話が掛かってきた。

「はい」

「私です。Lです。今から犯人の居場所を教えます」

「その必要はありませんぜL。あいつらの居場所は俺の手の中にあ
りますからフフフ・・・」

「そろそろ他の特殊刑事もそちらに来ます。なんとしてでも捕まえ
てください。捕まえた者にはご褒美として私が一番のお気に入りお
菓子を食べさせてあげましょう」

「了解です・・・でもお菓子は結構です。俺、甘い物嫌いなんで
・・・」

そう言つて電話を切った。

まもなく他の特殊刑事が到着するのは5分。

ブロロロ！ブロロロ！

と思つたらもう来てしまった。

「予定より早いじゃねえか」

「そんなことはありません。これが私のペースです」

「んなことりさつさとこんなミッションクリアしちゃいませよ」

「では、これより犯人逮捕に向かう」

「そうそう、Lさんからの伝言です。万が一の時は射殺しても構い
ませんという報告です」

「ワア！オ！射殺？あたし人殺すの大好き」

「おめえは相変わらずだなww」

「無駄話はこれくらいにしといて、ミッションを始めましょう」

こうして、3人の特殊刑事が動き始めた。

シブタク編5（後書き）

ここからはシブタク達と特殊刑事の戦いが始まります。
次回、シブタク達が不良魂を覚醒させます（たぶん）！
にぱ〜

シブタク編 6 (前書き)

シブタク達の前に謎の敵現る。そして、敵は1人だけじゃなく3人！？

シブタク編 6

俺達は奴からうまく逃げて隠れ家でうまく隠れた。

「しかし、あいつは一体何者だったんすかね？」

「分からねえ。だが、俺達の敵だということだけは分かる」

「チクショー、さっきの攻撃で俺っちのバイクに傷がついちゃったぜ。いきなり不意打ちとは卑怯くさす」

「しかし、ずっとここにいるから安全とは限らないッスよ」
確かにその通りだ。

いつまでもここにいるわけにはいかねえ。

別の場所に移動してなんとか敵から逃げねば……だが……。

ブロロロ！ブロロロ！

バイクの音が聞こえた。

俺達は今乗ってないから違う。

ということとは……。

「ターゲット発見……」

奴だ！

クソ！見つかったというのか……。

「え〜どこにいるのよ？全然いないじゃない」

へ？

「まあまあ、そう焦らずともちゃんといいますよ」

奴以外に他の人の声が聞こえる。

まさか、他に仲間がいたというのか！？

「ねえ、どこにいるの？」

「慌てんな。ちゃんといってるって」

すると、バイクからショットガンを手に持った。

ドンドンドンドン！！

数ヶ所弾を撃ち、バリケードは壊され見つかってしまった。

「お見事です」

俺達は呆然とした。

「……」

「見つけたわよ犯人さあ〜ん」

「さあ、我々はできれば手荒な真似はしたくはありません。平和に解決して平和にこの事件を終わらせたいのですよ。協力して貰えますでしょうか？」

ツレ達はあいつらが何のことを言っているのか理解できていなかった。

「事件？犯人？何のことだツスか！」

「とぼけんなよ！おまえらが学校の教師、生徒を殺した犯人だつてえことはもう知ってるんだからな！！」

「！！！」

俺はその言葉を聞いて体がビクツとした。

「はあっ！？何のことツスかわけわかんないツスねえタクさん？」

「……！！！」

俺はツレの声がまるで聞こえてなくて体を震え、ずっとだまっていた。

「どうしたんスカタクさん？」

「そうそう、あんたらの大将に聞いたほうがはえーかもな」

「！！！！」

俺はさらに体を震える。

「……」

「ちよつと無言じゃないのよ！！」

「仕方ありませんねえ。とっ捕まえて吐かすしかありませんね」
すると、3人は一歩ずつ俺達に近づいて来るのだった。

「ちよっ！こっち来ますよタクさん」

「あ、あつちいけー！ー！ー！！！」

するとヒグラシは自分のバイクに入っているかばんから逃亡用の煙けむり球りだまを投げた。

ボンッ！！

辺りは真つ白い煙に覆われ視界をさえぎる。

「クソッ！見えねえ」

ブロロロ！

「しまった！逃げられてしまったようです」

俺達はヒグラシのおかげでやつらから逃げることに成功した。

「ナイスだぜヒグラシ！」

「サンキュー！」

他のやつらは笑っていたが俺だけは笑えなかった。

「・・・」

「どうしたんすかタクさん？」

「い、いや、何でもねえさ・・・」

「なんかここんとこ最近タクさんおかしいツスよ？」

「そ、そうか？気のせいなんじゃないか？」

すると、タカマサは俺にこう言った。

「タクさん。あなた俺達に何か隠し事しているんじゃないですか？」

「!？」

他のみんなはその言葉に反応した。

もうコイツらに心配はかけたくねえ。

俺は決心して、ツレ達に告白した。

俺がデスノートを使って、せんこう達を殺したことやリュークのこ

となど全てみんなに言った。

「そう、そんなことがあったんすか」

「だから俺達に恨んでいるやつらの名前を聞いたんすね」

「おめえら、黙ってて本当にすまなかった！俺はリーダー失格だぜ・

・・・」

この時俺は、リュークのことを新たに分かった。

デスノートに触れたものには死神の姿が見えるということだ。

だからあの時、ツレ達には見えていなくて俺だけには見えていたんだ。

「よろしくな。俺が死神のリュークだ」

「ま、まじで死神が存在しているとは……」

「お、俺もしかして夢見てるのか？」

実際にみんなでカネマルの顔を抓た。

「いでー！夢じゃねえ！」

リユークに聞いたらあいつらのことが分かるかもしれないと俺はリユークに聞いてみた。

「おい、リユーク。あいつらは一体何者なんだ？」

「さあ、しらねえ」

全くいい加減な返事の仕方だった。

「しらないって……。リユークも分からないのか!？」

「俺は面白いことにしか興味ねえからな……」

「しかし、ずっと逃げてても埒があかねえ。戦うぞ！」

「ああ、ダイスケの言う通りだ。おまえら、反対はないか？」

「いいねえ。俺達もあんなんされたんだからお返ししないとな」

みんな大賛成みたいだ。

早速バイクに乗りながらの作戦会議を行った。

会議が始まって30分経過してようやくまとまった。

その作戦とは、俺と合わせて5人いる。

俺をおとりにして後の4人は2人1組に別れる。

第1グループは見事なコンビネーションでフォーメーションAを完成し、見事なハモをするタカマサとダイスケが組み、第2グループは残りのカネマルとヒグラシで組むことになった。

相手は3人。

こっちは三つに別れて戦うことになるがこの方がバランスがあつていい。

「いいか、この作戦で文句はねえな？」

ツレ達は全員で「ウツス!!!」と返事した。

ブロロロ!ブロロロ!

ちょうどそこに別のバイクの音が聞こえ出した。

そう、奴らが来たんだ。

「見つけたぜクソガキども！」

俺達は全速力で走った。

「テメエら、俺達と遊んでいるつもりなのか!?!」
ちようどそこに3つの別れ道があった。

「全員散開!！」

俺はそう合図して3つに別れた。

「なに! 別れただと!?!」

「仕方ありませんねえ。では我々も3つに別れるとしましょう」
やつらも3つに別れた。

俺は真中の道に入った。

後ろからシヨットガン野郎がやって来た。

あいつが俺の相手となるわけだ。

「逃がしやしねえぜヒヤハアハツハハハ!！」

俺は心の中で「みんな、無事でいてくれ!」そう思いながらバイクに乗っている。

今からここでこいつらとの決着がつく。

シブタク編6（後書き）

シブタク達はついにバトルモードに突入しました。シブタクのツレキャラは様々なのでどんな戦いをするのが楽しみにしてくださいー
いー！

シブタク編7（前書き）

なんかデスノートの原作とは全く違いますが・・・気にしないでください。

シブタク編 7

俺達は3つに別れて1人の敵と戦うことになった。

俺の相手はあのショットガン野郎だ。

「俺達3人を別れさせて戦いを有利にするっていうことかい。全く臆病者が考えそうな手だな」

「いや、これは立派なだけ。なぜならおまえとの決着つける時他のやつらがいると邪魔だからな！」

「ほほう、決着ねえ俺はアンタのライバルになった覚えはないんだがな」

「俺のバイクやお気に入りの服に傷を負わせたおまえが許さねえ！」

「はあ！？それ服だったの？てつきり俺は紙切れかと思っただぜww」
俺は今の発言でぶちぎれた。

「今なんつったコノヤロー！！」

「おー、怖っ。服のことでできてやがるくだらねえ」

あいつはさらに言ってきた。

「もたもたしてねえでさっさと始めやがれ！他の仲間が心配なんだよー！！」

「おまえは仲間思いなんだな。そうだな、俺もこいつをさっさと捕まえて他のやつの手伝いでもしに行こうかな」

「最後に聞きたいことがある。おまえらは一体何者なんだ！」

「俺らか？俺らはLに忠誠を誓った特殊刑事の1人ゲイ様だぜ！」

「L？誰だそいつは」

「Lを知らねえのか？ったく最近の若いもんはこれだからクズなんだよ」

このゲイという男はいつつもむかつく発言を連発してくる。

「さあ、おっぱじめようぜ！こっちはな射殺してもいいと許可をもらっているんでね。手加減はせんぞー！」

戦闘が始まった。

ゲイは自分の愛用ショットガンを取り出し俺に撃った。

ドンッ！

一発発砲した。

だが俺はバイクでその弾を交わした。

「バーカ！んな攻撃すぐによけちやるわ！！」

だが、攻撃をよけられてるのにゲイはニヤリと笑っていた。

とても気味が悪かった。

「少しはやるみたいだな。そうでもなければ面白くないからな！」

そう言つてゲイはまたショットガンで俺に向けて撃った。

俺は同じようによけようとしたが、その瞬間ゲイはさらに弾を撃った。

しかも、俺が行こうとした場所に。

「ぐわっ！」

身体には命中していないが足のところにかすり傷を負わされた。

「クッ！いてーぜチクショー！！」

「ハッ！なんだ痛くて吠え面かいてやがるぜハハハ！！」

こっちはもうどうすることもできない。

とそこで俺はあることを思い出した。

「さっきの弾はわざとはずしてやったんだ。俺はこう見えて腕利き

のスナイパーなんだぜ」

そう、俺のバイクにはヒグラシ特製の小型火炎放射器があることを思い出した。

それを取り出し、ゲイに向けた。

「これでもくらえ！！」

ブオオオオオオオ！！

加熱温度を最大にして出した。

ものすごい威力のあまり俺はぶっ飛んだ。

「うわっ！あいつなんて恐ろしいものを持っているんだ！？」

ゲイは炎から逃げるためバイクに乗り、脱出した。

「逃がすかー!!」

俺はこの戦いを命をかけるつもりで挑んでいる。

俺はバットを持ってゲイに突っ込んだ。

バキッ!

「ぐわーっ!!」

攻撃は見事に命中した。

頭を狙うはずが背中を狙ってしまった。

「いっつっつ・・・いってえじゃねーかよー!!」

ゲイはかなりお怒りの様子だった。

これはとてもやばい。

ゲイはバイクから別の武器を取り出した。

マシンガンだった。

ゲイは怖い顔をしながら俺に撃ち始めた。

俺はバイクから降りてしまっているから避けられなかった。

「ぐわー!!」

マシンガンの弾が俺の身体に命中する。

血もものすごい出た。

俺はその場で倒れた。

「ハ・ハハハ・やった。やったぜー!!」

ゲイのやつは勝利の雄叫びをしていたが、俺はまだ意識があって少し動けた。

そこにリユークが現れた。

「よっシブタク! ずいぶんぼろぼろになったもんだな」

「てめえ、なにしにきやがったんだ・・・?」

「いやね、ちよっとねおまえに言うことがあつて来たんだ」

「な・・・んだ・・・?」

「あいつ、デスノートで殺せばいいんじゃないかね?」

「・・・」

「・・・」

その手は思いつかなかった。

「ハハハ・・・そいつを忘れてたぜ・・・。だがこの状態じゃバイ

クまで遠い・・・」

絶体絶命だ。

「あゝ大丈夫大丈夫」

「なに・・・が大丈夫だ・・・。おまえ頭狂ってんじゃねえのか？」

「だってノートにあいつの名前書いたし」

「・・・え？っていうことは・・・」

「ああ。もうそろそろ死ぬぜ」

そして

「うっ！な・なんだ・・・は・腹が・・・」

バタツ！

ゲイはリユークによつて殺された。

「おまえ・・・いたんなら・・・言えよ」

「いやゝなんかいい感じだから邪魔しちゃ悪いと思ってずっと見てた」

ものすごい腹がたつたがまあよしとしよう。

後はツレ達の様子を見にいかねければならない。

あいつら無事だろうか・・・。

シブタク編7（後書き）

シブタクここで死ぬのか！っというところでリユークが敵を殺しちやいましたww。なんかリユークKYですねw。

シブタク編 8 (前書き)

第一回戦はシブタクの勝利に終わった。

本当はゲイを倒したのはシブタクではないんですけどね・・・。

シブタク編 8

シブタクとゲイの戦いはシブタクの勝利(?)に終わった。
残るはツレ達だけだ。

あいつら無事でいるだろうか・・・。

一方タカマサとダイスケグループは苦戦中であつた。

「クソツ！なんだあの女は？」

「美人だけとおつかねえぜっ！」

「ホーホツホツホ！特殊刑事の1人この「テラ」様の手に負えるかしら！」

テラの手には鎌があつた。

その鎌はまるで死神が使う鎌のような形と大きさをしていた。

テラはその鎌で振り回し続け、回りの資源ゴミや車などを切り刻んだ。

ものすごい切れ味だ。

「どっどっするんだダイスケ？」

「ど、どうすんだってあいては凶器を持ってるんだぞ！俺達の手には負えねえって！ここはやはりあの方法で行くしかねえ！」

「おっ！何かいい方法があるのか!？」

ダイスケが何か作戦を考えた、そう思つて期待しながら聞いたタカマサだが、

「ここは警察に連絡しよう！」

そうあっさり言ったダイスケの言葉にタカマサはガクツとしてつい手を離してしまつてバイクから降りてしまった。

「なんだよそれ！あんなの警察じゃ勝てねえよ!！」

「うゝん。それもそうだな」

この2人は本当にいいコンビ(?)だ。

「・・・なにごちゃごちゃ言つてんの！さっさとあたしに殺されなさいホーホツホツホ!！」

とテラはまた鎌を振り回し始め2人を追いかけた。

ズバツズバツズバババ！！

「やっぱり、こういう時って勇気を持って相手に立ち向かうのがいいかねえ？」

「俺に聞くなよ！そんなこと自分で考えろよ」

しかし、いつまでも逃げてたらいずれやられるだけ。

どうせやられるぐらいなら戦った方がまし。タカマサはそう思った。

「ウオオオオオ！！」

タカマサはその場で止まり、テラに向かって走った。

「む、無茶だ危ねえぞ！」

今のタカマサにはダイスケの声は聞こえていなかった。

「そうね、どんな相手にも立ち向かう。それでこそ男だわ！！」

タカマサとテラの一騎打ちが始まるうとした思ったら・・・

「うりやつ！！」

ボンッ！

なにやら煙みたいなのが地面から出てきて2人の回りを覆った。

「な、なによこれ？っていうか敵の姿が見えない・・・」

突然の煙でテラもびっくりした。

そうタカマサは煙玉を使ったのだ。

自分の姿が見えにくくするために使う道具。

「すきあり！！」

タカマサがテラの後ろを取り、持っているロープでテラを縛った。

「きやつ！卑怯者！」

「売られた喧嘩に卑怯もクソもあるかってえの！！」

「そ、そうなのか・・・」

「でもこれで俺らの完全勝利だな（笑）」

「ああ」

2人はそう喜び合ったが、

「フッフッフ・・・甘いわね坊や達・・・」

「あ？なんだって」

「この程度で私に勝ったつもりでいるわ・・・実に甘いわ！」
ズバツ！

テラを縛っていたロープが切れてしまった。

「バツバカな！ロープで縛ったのにどうして切れるんだ!？」

「フフフ・・・」

すると、テラは2人に何かを見せた。

「なんだって。隠し武器だと!」

テラの腕から鋭い爪のようなものが出てきた。

「私、相手を手加減するの苦手だから殺しちゃうかも」

テラは満面な笑みを2人に見せるが2人からはうれしそうに笑っているようには見えなかった。

まるで悪魔が笑い、邪悪なオーラを感じる。

そう、死のオーラを・・・。

「さて、この2人をどう料理しちゃおうかしらね?」

テラはゆっくりと歩いてきて、タカマサとダイスケは一歩ずつ後ろへ下がる。

そして、あまりの恐怖に耐えられなくなり2人は再び逃走した。

「うわーーーーーー!」

「どうして逃げるの?私と遊びましょう アーーーーーーハッハッハッハ!」

テラは地面に落ちていた鎌を拾い、降り始めた。

ズドーン!!

なんてパワーだ。

一振りで障害物をぶっ壊したではないか。

「逃がさないよ坊や達ーーーー!」

絶体絶命だ。

一体どうすればいいんだ!?

シブタク編 8 (後書き)

第2回戦はタカマサ・ダイスケVSテラの戦いでした。
本気モードのテラ怖いですねw。^{マッ}

この小説を見て刺激が強すぎた読者さんは「戻る」をクリックしてくださいませ。

シブタク編9（前書き）

シブタクVSゲイの戦いは見事シブタクが勝利（？）次はタカマサとダイスケVSテラ戦が始まる。果たして、二人の運命はいかに。

シブタク編 9

テラの凄まじいパワーは鎌を一振りで何百メートルもあるガラクタの山を切り刻む。

「さあ 鬼ごっこをするのもやめませんかしらねえ〜ッヒヒヒ」
やがてテラの口からは薄気味悪い声しか聞こえなくなった。

「なあ、お、おい どうしちゃったんだよ異常じゃねえかよ
」

ダイスケは体を震えながら言う。
なんと、見る見る顔が豹変していった。

目の外回りは全体黒く目は充血していて、髪がぼさぼさになっていた。

「私の獲物はど・こ・か・し・ら〜 ヒヤハハハ〜!!!」
豹変したテラはタカマサとダイスケを震えさせる。

その時、

プルルル！プルルル！

テラのポケットに入っている携帯が鳴り出し、テラはそれを取り出す。

「もしもし〜 こちらテラです〜」

もはや話し方も可笑しくなっている。

「テラですか？私です。Lです」

それはLからの連絡だった。

「あら〜ん。L様じゃないですか。私の携帯で電話してくるなんて初めてじゃない？もしかして、今ここで私に告白ですか〜ん」
なんと豹変したテラはさらに妄想が激しくなっていた。

「何を言っているんですかテラ。今はどういう状況を聞こうとしているんです」

「はい、ただいま二人のターゲットを発見しました。ですが、どこかに隠れてしまいました」

「わかりました。それでは直ちにターゲットを捕獲してください。
向こうが抵抗するようならば殺しても構いません」

そう言ってしは電話を切った。

「つまり、ターゲットを生かすも殺すも好きにしてもいいってこと
よね」

テラは再び動き始めた。

ダイスケはこのままではまずいと思い、テラのもとへ行くことす
るがタカマサはダイスケの腕を掴む。

「おい、何をやるんだ!？」

「決まってんだろが、奴と戦うんだよ!」

「やめとけ、奴の力を見ただろ。俺たちだけで倒せる相手じゃねえ
ぞ!」

「うっせえ、俺はアイツをさっさとぶちのめしてタクさんをお助け
しに行くんだよ!」

「はっ、おまえはただタクさんから手柄をもらって『タクさんの右
腕』になりてえただけだろが」

「な、なぜそれを　　っじゃなくてなんだとー!」

タカマサはダイスケに注意を言うつもりが揉め事が始まった。
すると、テラはその声の方へ駆けつけてとうとう見つかったしま

った。

「見いゝつけた、クソガキども」

「うわー!」

タカマサとダイスケは同時にハモツて二人で一斉に逃げた。

「今度こそ逃がさないわよん」

テラは走りながら、鎌を振りまくってどんどん障害物を切り落と
す。

「おい、このままじゃやられちまう。やっぱりバトルっきゃないっ
しょ」

「だから無茶はすんなって言うてるだろが」

「じゃあどつすりゃいいんだよ!」

タカマサとダイスケは走りながらまた揉め始める。

「いい加減にしなさい、あんたたち！」

さすがのテラモイライラして、鎌を振り回す勢いで二人のバランスを崩し、転ばした。

「イテツ！」とタカマサは言うが、テラは素早い動きでタカマサのもとにやってきた。

「まず最初にあなたから始末するわ」

絶対絶命だ。そう思ったタカマサは目を瞑った。

その時、ダイスケはテラの背後をとり不意打ちを掛けた。

「うおおおおおおおおおおおおおっ！！」

「うっ！！」

やっとテラに一撃を与えられたがまだ倒れてはいなかった。

「フッフ、しょうがない子たちね。そんなに死にたいのならお望みどおりその願いアタシが叶えさせてあげるわ！！」

テラは鎌を両手で持ち思いっきり振る体制をつくり、二人にとどめをさそうとする。

その時、

ブローローローロー！！

バイクの音だった。しかもその音はだんだん近づいて来ている。

やがてそのバイクは姿を見せ、猛スピードでテラに向かって体当たりをした。

「キャーローローロー！！」

その攻撃を受けて吹っ飛ばされテラはガラクタの山の中にある鉄柱の尖った部分が見事腹に突き刺さり、貫通した。

「ぼはっ！！」

腹を突き刺されたテラは口や腹から大量出血した。

「ア、アタシが　　こんな子どもに…ま、負けるな…んて

」

やがてテラは力を尽き死に、タカマサとダイスケはなんとか無事だった。

「た、助かったのか？」

「し、しかし一体誰が？」

突然、バイクは二人の前に現れた。

「よう、無事かおめえら」

「あ、は…はい」

「どなか存じ上げませんがありがとうございます」

二人はバイクに乗った人にお礼を言った。しかし、そのバイクに乗った人は突然大笑いをした。

「ガハハハ！おめえらなにかしこまってんだよ！」

「な、こ…この声は」

「タクさんですか！？」

「おう、無事か」

なんとバイクに乗ってテラをぶっ飛ばした男の正体はシブタクだった。

「タクさんこそ大丈夫ですか？」

「ああ、俺も変な敵に追われてたがなんとか倒したぜ」

「違うだろ、奴を殺したのは俺だからな」

シブタクの後ろでリユークが言う。しかし、それを聞いていないかのようにシブタクは無視する。

「さっすがタクさん、まさに敵なしツスね！！」

タカマサとダイスケはまた元のテンションに戻った。

そして、シブタクは辺りをキョロキョロと見回す。

「タカマサとダイスケが無事つつうことは確認したから、後はヒゲラシとカネマルだけだな」

「あいつら大丈夫だろうか」

タカマサは二人の心配をする。

「バツキヤロー！アイツらがそう簡単にくたばる奴らじゃねえっつの」とシブタクは主張する。

「そうツスね大丈夫ツスよね、それじゃ行きましようか！」

「おうよ！…！」

シブタクはバイクに乗り、タカマサとダイスケは走って後の二人を探すのだった。

シブタク編9（後書き）

デスノート（特別版）を読んでいる読者のみなさん、お久しぶりですゴキポンです！大変長らくお待たせしました。ついにシブタク編が復帰しました。みなさんには本当に大変ご迷惑をかけたかと思いますが、心配はいりません！決して僕が病んでいるからデスノート（特別版）はここで終了したなんて思わないでくださいね。

m これからもゴキポンを応援よろしくお願いします！！m（――）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1315i/>

デスノート（特別版）

2010年10月14日20時32分発行